離島の弱みを強みに変えていこう！！

「専門性向上に向けた継続」と「本音が言えるネットワークづくり」を目指して・・・

Amami-Kagoshima

そだちサポートプロジェクト

第1期　実践報告　2020 ▶ 2022

～インシデント・プロセス法を用いた事例検討会の取り組み～

はじめに

この報告書は発達支援に関わる支援者を対象に行なったオンライン事例検討会の取り組みをまとめたものです。

発達支援にあたっては、子どもが日常を過ごしている身近な地域で支援を受けられることが重要です。地域の中で支援者が連携し同じ方向を向いていることは、支援をより着実なものにし、それが子どもと家族の安心の基盤になると考えられます。

離島では、専門的資源や研修の機会などが限られるという弱みがあります。他方、離島の子育てには豊かな自然の中での外遊びの充実や元気なお年寄りの存在、つながりの強い地域共同体による子育てなど独自の強みもあります。この報告書でまとめたオンライン事例検討会は、離島の各地区の事業所をオンラインでつなぎ、支援者のネットワークを形成することを目的としたものです。定期的で継続的な研修の場を提供すると同時に、支援者が本音で相談できるつながりの場を作ること目指しています。それにより、それぞれの支援者が持つ専門性を共有し、互いに高めあうことで、離島の弱みを強みに変え、島全体の支援の専門性を高めていこうという試みです。

毎回の検討会は和やかで温かく、参加すると「明日も頑張ろう」と自然に活力が湧く思いがしました。子どもの発達は不思議なプロセスで、彼らの学びは試行錯誤の取り組みそのものです。同時に、発達支援の取り組みもまた、答えがない試行錯誤の連続です。支援者は時に、自分が行なっている支援が適切なのかどうか、迷い不安になることもあると思います。支援者同士が率直に不安を語り合い、相談し合える連携の場が身近にあることが、発達支援を行う中での支援者の試行錯誤を支える場になるのではないかと思います。

2020年から始めた事例検討の取り組みを振り返ると、多くのお子さんについて皆さんと話し合い、思いを寄せ合ってきました。今回、この報告書には１２の事例検討の報告を掲載しています。一人一人のお子さんについて、参加者と一緒に、明日からどう関わったら良いか、どんな関わりがあり得るのか、子どもはどんな心情なのか、なるべくお子さんの視点に立つように心がけながら話し合った内容です。

今回の取り組みは、奄美地区障がい者等基幹相談支援センター（ぴあリンク奄美）さんとの偶然の出会いを得て、すでに始めておられた研修会を発展させる形で継続してきたものです。ぴあリンク奄美さんが現場のニーズや思いを汲みとりながら土台を支えてくださり、参加者が日々の実践を振り返り、互いに学び合った取り組みです。島の懐の深さに支えられ、私たちもつながりに入れていただき、多くの素敵な出会いをし、学びを得ました。この出会いに感謝し、取り組みを支えてくださっている皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。この報告書が、読まれた方々の次の試行錯誤や取り組みの一助になればと願っています。

2023年 9月1日

鹿児島大学 大学院 臨床心理学研究科

准教授　髙橋　佳代

本冊子の構成と説明

そだちサポートプロジェクトとは？

「そだちサポートプロジェクト」とは、2019年度に立ち上げた、地域と研究者が連携して行う「子育て応援活動」「発達支援活動」を目的とした、鹿児島大学心理系教員グループと、奄美地区障がい者等基幹相談支援センターによる共同プロジェクトです。

地域の支援者や支援機関と心理系研究者が連携しながら、地域課題を分析し、それを元に必要な活動、支援を検討していきます。

そだちサポート勉強会とは？

そだちサポート勉強会は、「支援機関のネットワーク強化」「支援者技能の向上」を目的に、2020年度から行ってる、オンラインの事例検討会です。

「インシデント・プロセス法」という手法を用いて、奄美大島の療育関係事業所や学校教員、大学等をつなぎ、定期的な学びと交流の機会を提供しています。

目 次

○はじめに ---------- 1
○本冊子の構成と説明 ---------- 2
○インシデント・プロセス法を用いた勉強会とは？ --- 3
○事例検討の流れと進め方 ---------- 4
○取組事例まとめ ---------- 5～17
・CASE-01
・CASE-02
・CASE-03
・CASE-04
・CASE-05
・CASE-06
・CASE-07
・CASE-08
・CASE-09
・CASE-10
・CASE-11
・CASE-12
○おわりに ---------- 18
○共同編集略歴/事例について ---------- 19
○参考資料 ---------- 20～24
・第1期 実施状況まとめ
・第1期 参加者アンケートまとめ
○編集後記 ---------- 25

ヒトコトコラム

各事例の最後に鹿児島大学心理系教員による、事例の考え方に関するヒントやアドバイスがあります。

インシデント・プロセス法を用いた事例検討会とは？

インシデント・プロセス法とは？

提供された事例に関連して、参加者が事例提供者に質問し、その事例の周辺で実際に起こっている小さな出来事や背景など、困り感の原因に繋がっていると考えられる「情報」を収集し、それらをもとに必要と思われる支援を**参加者全員がそれぞれの視点で考えていく事例検討の方法**。

インシデント・プロセス法を用いることで期待できる効果

① **「ルールを共有」**することで、事例検討会に**「安心して参加できる雰囲気」**をつくる。
② 参加者の質問により必要な情報を集めることで、支援者間の **「理解の差を埋め」**、資料を準備する**「負担を減らす」**
③ 一問一答形式で質疑応答や支援方法の提案を行うことで、**「話したい事をまとめる」「みんなの前で発言する」**練習になる。
④ 役割（進行・記録・事例提供・参加者）を事前に決めることで、それぞれが自身の役割を理解し、主体的に参加することができる。
⑤ 参加者から出された支援に関する様々な意見やアイデアを**「共有」**し、事例提供者自身が行いたい支援を**「選択」**することで、すぐに自身の**「実践に生かす」**ことができる。

みんなが前向きに話し合うためにできること

①話し合いのルールを決める（安心できるルールがあることで、参加者が発言しやすくなるため）
・参加者は、これまでの支援や基本情報を集めるための質疑、提案された支援など、すべての発言を批判しない。
・事例提供者は把握していないことについて、「わからない、知らない」と答えてもよい。
⇒「知らない」という事も大事な気づき（新たな視点や、支援者同士の理解の「ズレ」も気づくきっかけになる）

②事例に関する資料の準備を簡素化する。（事例提供者の負担を軽減するため）
・必要な情報を参加者の質問を通して集めていくことで、それぞれがケースを理解していく時間にもなる。
・行うのはあくまでも「事例検討」。（「事例発表」ではないので、詳細な準備を行う必要はない）
・事例提供者は、質問についてその場で手持ちの資料を確認したり、同事業所の他のメンバーに聞きながら説明していくことで、解決に必要な要素を改めて確認することができる。
・他の参加者もサポートする意識が芽生え、「みんなで考える」という雰囲気つくりにも繋がる。

事例検討の流れと進め方

1.ルールを確認する（1分）

ルール①：他の参加者の発言をすべて受け止める。
ルール②：質問は、一問一答形式で行う。
ルール③：答えが分からない時は「わかりません」と答える。
ルール④：提案する支援方法は、「具体的に」「すぐにでも取り組めそうなこと」を。
ルール⑤：提案された意見の中から取り組みたい支援方法は、事例提供者が選ぶ。

2.役割を確認する（1分）

3.事例提供者が事例について説明する（2分）

・事例提供者は基本情報を説明し、最後に**「今一番解決したい（困っている）と思っているできごと」**について、参加者に伝える。

4.事例についての情報を集める（10分）

・事例提供者が伝えた「解決したいできごと」に関連すると思われる情報を、参加者との質疑応答で、明らかにしていく。

ルール① ② ③

5.それぞれで支援方法を考える（5分）

・「もし自分ならどんな支援を行うか」という視点で考える。
・「いつ」「だれが」「どこで」「どんな」支援をするという風に具体的に提案する。

ルール④

6.それぞれが考えた支援方法を発表して整理する（20分）

・考えた支援方法を、具体的に分かりやすい表現で簡潔に伝える。
・考えた理由を話したい時には、最後に伝える。
・支援方法をいくつかのグループにまとめて整理する。

7.事例提供者が「取り組みたい」と考えた支援方法を発表する（2分）

・出された意見の中から、**「一番いい支援方法」**を決めるのではなく、事例提供者が**「すぐにでも取り組みたいと思った支援方法」**を選ぶ。

ルール⑤

取り組み事例まとめ

CASE-01

他の子どもに興味を示さないAくん

CASE-02

食事に苦手な食材が入っているとかんしゃくを起こしてしまうBくん

CASE-03

カッとなると友達を噛んだり叩いたりしてしまうCくん

CASE-04

ひとり遊びが多く友達と一緒に遊ぶことが少ないDさん

CASE-05

食事に取り組むまでに時間がかかってしまうEくん

CASE-06

身近な人の前だと口調が荒くなってしまうFさん

CASE-07

気になることがあると衝動的に行動してしまうGくん

CASE-08

ささいなウソで友達とトラブルになってしまうHくん

CASE-09

自分の髪の毛を引っ張って抜いてしまうIくん

CASE-10

感情が高ぶると幼い言動で表現をしてしまうJくん

CASE-11

思い込みから、友達に手を挙げてしまうKくん

CASE-12

イライラした時に行動が荒くなってしまうLくん

CASE-01

他の子どもに興味を示さないAくん

児童発達支援/年中

基本情報と集められた情報

〇正式な診断なし
〇不注意な行動や、数字へのこだわりがある。
〇興味のあるものが気になり、衝動的な言動が見られる。

・一人で遊んでいるところに、他の子が入って来ても、気にせず一人遊びを続ける。
・他の子におもちゃを取られても、あきらめるのでトラブルにはならない。
・他の子どもに興味を示さない。（兄とは、兄弟げんかをすることがある。）
・大人が絵本を読むと、うれしそうに、観ているが、自分で読むことはない。
・アニメのＤＶＤなどは興味を示さない。
・おしゃべりは上手で、話すことはできる。向かい合って話すが、言葉に抑揚がない。
・プラレールで遊ぶことは好き。「せーの」という掛け声は好き。
・話をしていても、数字が目につくと、急に声を出して読むことがある。
・全体での活動には、最後まで参加することができる。

支援者や家族が解決したいこと

友だちと、一緒に遊べるようになってほしい。

提案された支援

・遊びの中に数字を取り入れる。
　⇒遊びの時に「点数をつける」「みんなで点数を数える」など、数字と遊びを関連づける。
　⇒数字に関連した絵本を、お友達と一緒に観て、やり取りをする。
・つながり遊びを通して、他の子どもと活動を共有できる場面を増やす。
・他の子どもとの間に支援者が入り、やり取りを促す。
・「せーの」という掛け声を一緒に出すような活動を行う。
・無理せず、自分の気持ちを表現できる空間をつくる。

ヒトコトコラム

大人との共有をベースに、お友達と一緒にすることの楽しさに拡がっていくことを期待しましょう。

2歳代中ごろから「同年代のお友達に興味・関心を持つ」という発達が加速します。
初めは、興味があるだけなので、お友達の遊んでいるおもちゃが楽しそうに見えて、「おもちゃを取ってしまう」などのトラブルも多い時期です。この時期の経験をもとに、徐々にお友達と関わりながら遊ぶことができるように発達していきます。それ以前の発達段階では、逆に自分の興味・関心のあることに集中して、周囲をシャットダウンしているので、実は「お友達との関りを特に必要としていない時期」でもあります。
事例の子どもさんの場合、自分の興味・関心のあることが明確であり、その世界に没頭することを楽しんでいるようです。その力はとても素敵な事なので、「自分の世界に没頭して遊ぶことができる時間の確保」も大切にしてほしいと思います。
全体の活動にも参加することができて、「せーの」の声かけを楽しめる力もあることが、本人の強みでもあります。大人に対して楽しみなことを伝える力もあります。

「伝える」から「共有する」に変わっていくために、本人の言葉として表現されない思いを代弁して もらえると良いと思います。（「楽しみだね～」「わくわくするね～」など）

CASE-02

食事に苦手な食材が入っているとかんしゃくを起こしてしまうBくん

児童発達支援/年少

基本情報と集められた情報

〇正式な診断なし
〇偏食があり、野菜全般が苦手。好きなものはたくさん食べる。
〇言葉が不明瞭で語彙が少ない

・嫌なことがあると、泣きわめくなどの行動がある。
・揚げ物、肉系、ごはん、スパゲッティ、ハンバーグ、カレーなどは好き。
・苦手な野菜も、カレーやスパゲティに入っていたら食べることもある。
・家庭では、かんしゃくを起こさないように好きなメニューしか出していない。
・癇癪が起きた時は、部屋を出て気分転換すると、5分くらいで戻ることができる。
・下あごが出ており、噛み合わせが悪い。
・苦手な食材が出た時には、「小さくして食べる」「口づけだけをしてみる」など
スモールステップで働きかけている。

支援者や家族が解決したいこと

食事に苦手な食材が入っていても食べられるようになってほしい。

提案された支援

・食全体に興味が持てるような活動を取り入れる。
⇒クッキング、 野菜を育てるなど。
・食事に関する目標を変える。
⇒「苦手なものがあっても落ち着いて伝えることができる」など。
・褒める体験を増やし、前向きな気持ちで食事に向かえるように働きかける。
・歯を食いしばる運動や遊び（うんていなど）を活動に取り入れる。

ヒトコトコラム

偏食は体質であることも多いため、まずは「偏食はダメ」
という考えを見直すと良いと言われています。

発達特性を持つお子さんにとって偏食は身近な課題で、ご苦労されていることも多いかと思います。多くの発達特性を持つお子さんの偏食は、通常の好き嫌いの範囲ではおさまらない強い傾向を示すことが多いのが特徴です。

まずは、偏食がどうして起きるのかを考えると ①感覚の問題、②想像の特異性、③口腔機能的な問題などが考えられます。

①は「揚物の衣が痛い」「味がせず美味しく感じられない」など味覚や触覚、嗅覚、温度などの感覚の鋭敏さや鈍感さによって起こることがあります。②は、「いちごの粒が気持ち悪い」など想像の特異性ゆえに起こる問題です。③はうまく咀嚼できなかったり飲み込みが困難などで食べること自体に拒否感が出て、安心できる食材ばかりを食べるという場合があります。

事例の子どもさんの場合、濃い味を好んでいますので、薄味や素材そのものの味では美味しく感じられないのかもしれません。偏食が強いお子さんは生活全般でもこだわりが強いことが多く、食べるようにという指導で食事場面に拒否的になるお子さんもいます。今は現在100点満点の栄養バランスでなくとも、今よりも食べられるものを増やしていく、食事場面を子どもが過ごしやすくなるよう支援するという発想が良いかもしれません。

感覚の問題やこだわりは年齢とともに変化することも多いです。子どもの食事の傾向を細かく把握し、具材を素揚げするなど、調理方法を変えたり、好きなもの同士を組み合わせたり、絵本や食材に触れる体験などを活用する等により食事を楽しめる関わりができると良いですね。

CASE-03

ひとり遊びが多く友達と一緒に遊ぶことが少ないCさん

児童発達支援/年中

基本情報と集められた情報

〇正式な診断なし
〇新しいことに取り組むときに時間がかかる。
〇一人遊びが好き（塗り絵、お絵かき、一人でのごっこ遊び　等）

・失敗を怖がるため、全身運動は苦手。
・「今日の遊び」や「友達は誰が来るのか」など、自分から支援者に聞いてくる。
・話をする時は「あのね、あのね」と繰り返してから話すことが多い。
・したくないことがあると、部屋の隅でうずくまっていたり、寝転がったりする。
・気持ちの切り替えが難しく、苦手なことがあると、泣き続けることがある。
（半日泣いたこともある）
・少しずつ友達の輪に入れるようにはなってきている。
・塗り絵は得意で、丁寧に最後まで集中して取り組むことができる。
・集団遊びは、気分によってやる時もあればやらないこともある。

支援者や家族が解決したいこと

友達と、一緒に「ごっこ遊び」などをできるようになってほしい。

提案された支援

・制作遊びで作ったものを使って、お友達も一緒のごっこ遊びにつなげる。
・支援者と、もっと関わる時間を作る。
・自由遊びの際に、支援者が一緒に遊ぶ。
・身体を動かす遊びを活動に取り入れる。

ヒトコトコラム

「ひとり遊び」の得意な子どもたちが「関わり遊び」に参加することは、チャレンジであることを周囲の大人は知っておく必要があります。

「一人遊び」から「関わり遊び」へのテーマは、多くの育ち支援の現場で話題になるテーマです。
集団遊びが上手になる4歳以降は、保護者や周りの大人も子どもらしい集団遊びを楽しんで欲しいという気持ちが強くなる時期ですね。それでも集団遊びが様々な理由で「好きではない」子どもたちがいることも事実です。
事例の子どもさんのように、新しい事に取り組むのに時間がかかるような場合、子どもたちの遊びは変化の連続である点で非常に疲れるものになっていたりします。また失敗に対する不安の強い子どもさんの場合には、見通しのつかない遊びを怖がったりもします。事例の取り組みにあるように、見通しの持てる（経験のある・終わりの見える）遊びを設定することは緊張感が低下するので参加しやすい活動といえます。
本人の参加しやすい活動から取り組むことが大切です

本人のチャレンジと自信を身に着けてもらうために「関わり遊び」の後には、その子どもにとってほっと一息つける時間や空間を設定しておきましょう。

CASE-04

カッとなると、友達を噛んだり叩いたりしてしまうDくん

児童発達支援/年中

基本情報と集められた情報

〇正式な診断名なし
〇もともと言動は荒かったが、年中になってから「噛む」ようになった。
〇一日の中で、感情の起伏はげしい。

・感情の起伏が激しく、穏やかな表情から急にカッとなり、荒い行動がでてしまうことがある。
・友達は好きで、仲良くしようとするが、うまくかみ合わないので、衝突してしまうことが多い。
・小さい子には優しく接することができる。
・イライラする原因としては、「自分が決めたルールを友達が守らない」「自分が示したルールが通らない」時が多い。
・攻撃的な行動（噛む、叩く）は、複数回続くこともある。

支援者や家族が解決したいこと

イライラした気持ちを言葉やジェスチャーなどの方法で伝えられるようになってほしい。

提案された支援

・本人の思いや言葉を受け止めるため、個別に対応する時間を増やす。
・クールダウンできる環境を事前に設定しておく。
・穏やかに過ごせる時間を増やし、良い言動が出たらその都度褒める。
・小さな子供と関わるなど気持ちを満たす体験ができる環境を設定する。
・ルールを決める時に、全員の場で確認し、ルールを守って遊べたら褒める。
・本人の提案を一度受けて止める。
・攻撃的な行動を起こした後、支援者と行動や思いを振返る時間を作り、適切な表現方法を一緒に考える。
・イライラした気持ちを、支援者の手を握る強さで、表現してもらう。

ヒトコトコラム

感情が高まってしまった時には、気持ちが落ち着くことを優先し、落ち着いた時に望ましい行動を伝え、しっかり褒めて、行動を意識づけることを心がけましょう。

感情を調整する力の発達は幼少期から青年期までをかけて伸びていく力です。
事例の子どもさんはお友達に興味があり、一緒に遊びたいものの、思い通りにならないときに感情が昂って叩いたり噛んだりしてしまうようです。
対人意識が成長し、他児との関わりが増えたために起こっていることと捉えられます。それは成長の証ですので素晴らしいことです。他方。思い通りにいかないときに気持ちや行動を調整しながら他者に自分の気持ちを伝えていくことが次の課題となるでしょう。 お友達とぶつかってしまう場面をよく観察し、手が出やすい場面を予測して、支援ポイントとして支援ができるといいですね。

感情を抑える練習ではなく、しっかりと気持ちを表現することを育てていくためにも、イライラしている気持ちも含めて「自分の気持ちがわかってもらったという体験を支援者との間で積む」ことや、「自分の思いを支援者の力も借りながら他児に伝えていく支援」を大切にしましょう。

CASE-05

食事に取り組むまで、時間がかかってしまうEくん

児童発達支援/年長

基本情報と集められた情報

〇自閉症スペクトラム（長期間経鼻チューブを使用）
〇食事や着替えの時には、本人が好きな人形を使って働きかけている。
〇困った時には、大人に対して目で訴えかけてくる。

・乳幼児期に、ミルクを飲まず嘔吐が多かったため、経鼻チューブを使用開始。
・チューブ着用時は、離乳食に取り組んでいた。
・身長、体重の増加に伴い、経鼻チューブは外れ、現在は、普通食も準備している。
・人形や手袋を使った働きかけは、1年ほど前から始めた。支援者が人形を使い、なり切って応援すると、食事も進む。
・食事中に「おいしい」という言葉はでるが、好きなわけではないように感じる。
・ままごとでは、料理を食べる真似はする。

支援者や家族が解決したいこと

食事を自分で集中して食べることができるようになってほしい。

提案された支援

・人形を使った関りを、本人が納得いくまで続ける。
・人形を使った働きかけのバリエーションを増やしていく。
・味覚遊びを活動に取り入れる（様々な味を味わう機会を増やす。）
・人形での関りを、フェードアウトできるように使う場面を減らしていく。
・友達の「マネをしたい」と思い合えるような関係性をつくっていく。
・家庭でも、ままごと遊びに取り組んでもらい、食に関する興味を拡げていく。

ヒトコトコラム

生活年齢と発達年齢のズレが大きい場合は、苦手が隠れていることも多いため、本人の苦手を汲み取った支援が重要です。

領域によって、生活年齢と本人の発達年齢が合致しないことがあるかと思います。このお子さんの場合は、乳幼児期に経鼻チューブを使用していたこともあり、「摂食・嚥下動作」や「食事動作」に不得手があるのかもしれません。

そう考えると、お子さんにとって、食事場面は自分の苦手に触れる場面であり、その場面に向かうには、気持ちの準備がいると思います。

そのため、人形を用いることで、自分を励まし、気分を高揚させて取り組んでいるととらえることもできます。今は、支援者が、人形を使って、お子さんの気持ちに寄り添い、気持ちを高めながら支援を続けていくことが、お子さんが苦手場面に向かうためのアプローチになっているのではないでしょうか。

この段階を十分に踏むことで、今は人形を使って自分を励ましていますが、徐々に自分で自分を励ます自尊心が根付いていくものと考えられます。

しっかりと成功体験を積み重ねる必要があります。並行して、「ままごと遊び」や「食育体験」などを通した「食への興味」を育てていくアプローチや、お腹がすくようにしっかりとからだを動かすこともよいでしょう。

CASE-06

身近な人の前だと口調が荒くなってしまうFさん

小学校（知的障害支援学級） /低学年

基本情報と集められた情報

〇発達がゆっくりで、不器用なところがある。
〇仲が良い友達が多いと、口調が荒くなりがち（小さい子に対しても口調は強い）
〇関係性があまりとれていない友達がいると弱々しい口調になる。

・「お前」「あんた」「きもい」などの単語を使い、表情がきつい
・慣れた友達がいない時は、しゅんとした様子で大人に頼りがち（頼る大人も選んでいる）
・友達と遊ぶときに主導権を取りたがるが、相手も同様の場合、対立することが多い。
・言葉のやり取りはスムーズ。運動面も特に困り感はない。
・塗り絵は好き。
・最後まで向き合う事や記憶することが苦手（復習しないと忘れていることが多い）
・女の子と遊ぶことが多い。

支援者や家族が解決したいこと

相手の気持ちを理解して、やさしい口調で話せるようになってほしい。

提案された支援

・荒い言葉が出たときに、1対1の場面をつくり、話をする。
・パペットや絵本を使って、モデルを示す
　⇒人との関係を客観的に見せるような活動を取り入れる。
・学校での頑張りを評価する機会をもつ（場面による本人の違いの理解）
・本人の気持ちに寄り添い、言葉の背景にある気持ちをやさしい言葉で代弁する。
・関わり方を伝え、本人が良い行動を行えた時、褒める関りをしていく。

ヒトコトコラム

「荒い言葉」「汚い言葉」は子どもにとって非常に刺激的です。
刺激が強い言葉が持つ力に子どもたちは「憧れ」「恐怖」「緊張」
「興味」といった様々な感情を強く揺さぶられます。

子ども達が「荒い」「汚い」言葉を使う理由は、「新しく知った言葉を使ってみたい」「周囲の反応を引き出したい」といったものです。大人が「そんな言葉使っちゃダメ！」と反応すると子どもは関わってもらったと思ってしまうのです。
事例の子どもさんは、慣れている友達や大人に対して荒い・汚い言葉を使うことが多いようですが、慣れない子どもの 前では弱々しい態度になって言葉も少ないといった様子が見られます。荒い言葉がよくないという事はわかっているようですが、どんな言葉がよいのかわからないように思えます。自信がないために慣れた人には知っている荒い言葉で対応してしまうのかもしれません。荒い言葉・汚い言葉には反応しないのが効果的な方法です。言葉の意味を一緒に考えたり、言われた人の気持ちを代弁することにも意味があります。

本人の言葉を代弁したり、本人の発言が拙くとも丁寧に扱うことで、適切な言葉の選択をできるようになると思います。子どもの言動に意識を向けて、丁寧に関わっていきましょう。

CASE-07

気になることがあると衝動的に行動してしまうGくん　小学校/中学年

基本情報と集められた情報

〇自閉症スペクトラム
〇揺れる遊び（特にトランポリン）は好き

・危険なことに対する衝動がある。
・マンホールなどをみると「落ちたらどうなる？」など質問してくる。
・「自動ドアに石を挟んでみたい」という衝動がある。（行ってはいない。）
・台風の時は、川や海の波が気になる。
・海の深いところにも興味があり、「息ができなくなるの」などと聞いてくることがある。
・1年生頃から衝動的な行動は見られているが、最近は強くなっているように感じる。
・トランポリンなど体を沢山使った後は落ち着いている。
・学校では、課題に取り組んだ後は動いてよい（立ち上がってクルクル回る）など、動と静を意識した配慮を行ってくれている。

支援者や家族が解決したいこと

衝動的な行動を自分でコントロールできるようになってほしい。

提案された支援

・興味があるものや場所について、前向きな情報を伝える。
・視覚的に理解しやすいツールを使い、想いや表情について一緒に意味づけしていく。
・危険予知について学ぶ時間を作る。
・危険予知に関するイラストを使った活動で、危険の予測や因果関係を考えられるように取り組んでみる。
・活動に「動」と「静」を取り入れた活動や、感覚を刺激する活動に取り組む。

ヒトコトコラム

支援者と、興味のあるものの話題をめぐって、一緒に想像を膨らませ、知的な関心を共有していくことで満足を得られていく可能性もあります。

「気になるものに触りたい」という衝動は強く、周りを見たり、一歩踏みとどまって考える力が伸びてくるまで、その衝動をコントロールすることに苦労する子どもさんは多いです。「気になるもの」はお子さんによってそれぞれですが、事例の子どもさんの場合は、「動くもの」や「通常とは異なった動きや音がしているもの」など「刺激が強いもの」のようです。

この事例の子どもさんの場合、知的な好奇心も旺盛なようですので、「海の中のもの」や「落下するもの」など、純粋に「どうなるのか、どうなっているのか知りたい」という気持ちも強いのかもしれません。

他方、刺激を好む場合は「高いところや危険なところ」「ちょっとした不安や怖いもの」などに近づいていくお子さんも多いです。

考えられる関りとして・・・

・日頃の遊びの中で本人が好む、揺れ感覚に関する刺激をしっかり取り入れる。
・興味のある話題を支援者と一緒に想像を膨らませ、知的な関心を共有していくことで満足につなげる。
・言葉が上手な場合、論理的に言葉で伝え、危険意識を育んでいく。
（「なぜ危険なのか」「近づくとなぜ危険なのか」「どこまでは大丈夫なのか」等）

CASE-08

ささいなウソで友達とトラブルになってしまうHくん

小学校/中学年

基本情報と集められた情報

〇正式な診断名なし
〇イライラして怒りやすい。
〇ささいなウソをついてしまうことで友達とトラブルになりやすい。

・「できないことをできるといってしまう」「友達よりいいものを持っている」など、素直な表現ができないことが多い。
・敷地の外に飛び出していくような事はないが、「少しの移動でも走っていく」「思いついたところに走っていく」などの行動が見られる。
・疲れている時にイライラしていることがある。（学校からの送迎車内など）
・工作や身体を動かすことは好き。（工作は集中し、完成するまで座っていることができる。）

支援者や家族が解決したいこと

自分の気持ちを素直な言葉で伝えられるようになってほしい。

提案された支援

・自分の気持ちを素直な言葉で表現できるように働きかける。
⇒支援者が「本人の言葉を言い換えて代弁する」など、正しい表現に触れる機会を作る。
・「良い行動」や「頑張っている姿」などについて、褒めるようにする。
⇒「〇〇をがんばってるね」「今の関りは良かったね」等、好きな活動の様子について、些細な事から褒めていく。
・気持ちが落ち着いた後に、イライラの原因を聞く時間をつくる。
・イライラした時に、気持ちが落ち着くような「遊び」を用意しておく。
・正確ではない発言についても、一旦受け止める（真偽を確認しない。）

ヒトコトコラム

「ウソ」が持っている意味を探してみるのもいいのかもしれません。

「ウソをつく」という行動は、大人にとってはとても心配になる行動だと思います。一方で発達的にみると「ウソ」をつけるようになる事は成長を意味します。 **「現実が分かる→現実がもたらす結果を想像できる」**ように成長したということなのです。 想像した結果が「望ましくない」場合、「ウソ」をつくことになるのですが、幼児期は「自分にとって」、大人の場合は、「相手にとって」ということもあります。

子どもは年齢が低いほど「辻褄が合わないウソ」が多くなります。特に事例のように、「勝ち負けに強い意識があったり、こだわりがあったりする」場合には、自分の状況を認められなくて「ウソ」をついてしまうことがあります。

衝動性が高く「思いつきが口から出てくる」といったタイプの子どももいます。そのようなタイプの子どもと対応する際は**「真偽の確認」よりも「一緒に問題の解決のために話し合う」**とよいでしょう。

ストレスが多くある場合には「衝動性」も高まることが多いので、うそが増える場合には「環境調整」も検討してみるのも良いかもしれません。（「昨日宇宙人に会ったよ」など・・・）

〇「ウソ」をつくことで、叱られたり、疑われたりしたとしても、それが「関わってもらえている」という事になっていませんか？
〇「ウソ」をついても、本当を言っても叱られる（疑われる）という状況になっていたりしていませんか？
⇒「ウソ」の真偽を暴こうとすることで、より嘘を重ねさせてしまうこともあったりします。

CASE-09

自分の髪の毛を引っ張って抜いてしまうIくん

小学校/高学年

基本情報と集められた情報

〇自閉症スペクトラム
〇感触系のものは好き。（しぼんだ風船、スライム等）
〇言葉は出るが、オウム返しで、やり取りは難しい。

・家族は本人をかわいがっており、パーマをかけたが、その時から髪を抜くようになった。
・特定のきっかけで髪を抜くことが多い。（「宿題が終わった後」「好きな本を読むまでの間」「友達の大きな声が聞こえた時」など）
・髪を抜くときは、感覚を確かめながら抜いている。
・抜いた髪の毛は、集めて、感触を楽しんでいる様子がある。（丸める、固める、引っ張る等）
・普段はベレー帽をかぶっているが、気になったら、帽子を脱いで抜くことがある。
・髪の毛を抜くことを止めるとイライラしている様子がある。
・人の髪の毛を抜くことはない。
・イライラした時、以前は腕や指を噛む行動が見られていた。

支援者や家族が解決したいこと

髪を抜く刺激に変わるものを見つけたい。

提案された支援

・「抜きたいの？」と声掛けして、本人の反応を確かめる。
・手をマッサージして、髪を抜く時間を減らす。
・感覚的に好きなものを準備して、本人が落ち着ける活動のパターンを増やす。（砂粘土、無限プチプチ、毛糸等）
・髪の毛を抜かずにいられた時に褒めるようにする。
・家族へ散髪することを提案する。

ヒトコトコラム

自己刺激行動を軽減していくためには、行動のレパートリーや本人が積極的に取り組むことを増やしたり、他の安心できる感覚を入力することなどが有効です。

自分で繰り返し、感覚刺激を得る行動を「自己刺激行動」と呼ぶことがあります。「自己刺激行動」は「何もすることがない時」「何をしてよいか分からない時」「混乱している時」などによく見られます。また、感覚が過度に敏感、もしくは鈍麻なお子さんも多いです。

事例の子どもさんは、生活の中で頭皮への刺激体験がきっかけで、髪の毛を抜く感覚を得る自己刺激行動がでてきたようです。

自己刺激行動は楽しんで活動していくる時には出にくいことから、自己刺激行動を軽減していく際には、「行動のレパートリーを増やすこと」「本人が積極的に取り組むことを増やすこと」「他の安心できる感覚を入力すること」などが有効です。

感覚の「過敏」もしくは「鈍麻」の場合の対応として
「過敏」の場合　⇒　不快な刺激を回避したり、妨害する手段を検討する。
「鈍麻」の場合　⇒　様々な皮膚感覚を体験しながら育てていく。
（「くすぐったいね」「冷たいね」「痛いね」など）

CASE-10

感情が高ぶると幼い言動で気持ちを表現をしてしまうJくん

特別支援学校/中学部

基本情報と集められた情報

〇進行性の神経難病
〇言動の幼さや怒り方に特徴がある。（涙がでる、駄々をこねる）
〇怒っている様子を低学年の子からからかわれてしまうことがある。

・怒りがピークになると、涙が出ることもある。
・興奮した時には、アニメの技で仕返しをしたり、寝転んで駄々をこねることもある。
・「動きの硬さ」「手先の震え」など、動きに特徴があり、からかいの原因になっている。
・人見知りせず、いろんな大人や子どもに自分から話しかけていく。
・気持ちが高ぶった時には、別室に移動し、気落ちを落ち着ける時間を取っている。
・落ち着いた後は、感情的になった理由を言葉で伝えることができる。

支援者や家族が解決したいこと

感情が高ぶった場面でも、落ち着いて自分の気持ちを伝えられるように、表現方法と気持ちのコントロールを身に着けてほしい。

提案された支援

〇本人の感情を支援者と一緒に「ラベリング」する。
　⇒「くやしいね」など本人の気持ちを言語化する。
〇本人が周囲から認められるような活動を設定する。
〇得意なことを活かして役割を作る
　⇒おしゃべりが好きなので「インタビュアー」になってもらうなど
〇幼いと思われる言動について、落ち着いている場面で振り返りを行う。
〇トラブルになりそうな場面で、早めに支援者が介入し、別室でクールダウンを促す。

ヒトコトコラム

生活年齢にあった関りを続けることで、年齢自覚が生まれたり、自分が周囲にどう見られているかといった関心も芽生えてくると思います。

難病指定の進行性の病気の中には、「運動全般」「動きの硬さ」「手先の震え」は主症状で、動かすことはできるのに上手にできないという特徴がありものもあります。年齢相応にやりたい（家族のやってほしい）という気持ちとは裏腹に疾患の特性として「できない」また「だんだんできなくなる」ことも多いです。

進行性の病気の場合、「できなくなる」ことへの不安は非常に強く、当事者でない私たちには想像できないものだと思います。障害の特性や病気の症状が「からかい」の対象となっている場合には、周囲の子どもたちへの指導、環境調整が必須です。**「本人の尊厳が保たれる」**ことが、本人が**「生活年齢相応のふるまいができる前提条件」**なのです。

生活年齢（生まれてからの今日まで）と知的年齢（発達的に何歳相当であるか）は異なります。知的発達が緩やかな場合、理解や興味関心は生活年齢に比して幼く見えてしまう事があります

指示や教示は知的年齢に応じて理解しやすい形にすることが必要ですが、日常での関わりは生活年齢にふさわしい関わりであることが必要です。

CASE-11

思い込みから、友達に手を挙げてしまうKくん

特別支援学校/中学部

基本情報と集められた情報

〇知的障がい、発達障がい

〇人の絵を描くこと、フリスビーは得意

・自分のことを「見ていた」という理由でお友達に手を出すことがある。
・特定の子に対して手を出している。
・自分なりの理由により、手を出す行動は、中学生になってから現れてきた。
（引っ越しなど環境に大きな変化があった。）
・遊びの中でうまくいかなくて手を出す場面は以前もあった。
・支援者や仲の良い子に対しては、同様な行動を取ることはない。
・楽しんでいる時には同様な行動は出ていない。
・自分の嫌な気持ちは言葉で伝えることはできている。
・手を出した後、話を聞くと謝ることもできる。

支援者や家族が解決したいこと

「いやな気持ち」「イライラした気持ち」を言葉で伝えられるようになってほしい。

提案された支援

・好きな遊びを通して、達成感や喜びを分かち合う場面を作る。
・支援者が間に入り、お互いの良いところを出しう活動を行う。
・支援が間に入って一緒に活動を行う。
・行動を起こす前に支援者に相談してくれるように伝える。
・「相手を叩く」以外の行動の代替え案を示し、一緒に練習する（言葉で伝える練習）
・どんな時に「相手が自分のことを見ている」のか一緒に振り替える時間を設定する。
・手を出した時の本人の気持ちを言語化するのを手伝い、どのように行動したらよかったか一緒に考える。

ヒトコトコラム

「見られている」という気持ちがして、不安になっている時には、本人のその気持ちを受け止めるとよいでしょう。

他児へ手を出してしまう行動の背景は「言葉で思いが伝えられない」「コミュニケーションの仕方がわからない」「衝動を抑えることができない」などお子さんによって様々です。また、背景によって、「気持ちを代弁する」「具体的な関りを教える」などその対応も異なってきます。

事例の子どもさんの場合は、「見られているのではないか」という不安から、不快情動が高まって、それを解消するために相手を叩いていたようです。この場合は、「お子さんが持つ不安にどう対応していくのか」という事が支援のカギになるでしょう。 不安のきっかけは分かりませんが、子ども同士の関りで、本人にとっては何らかの体験があり、それがこだわり行動様になっていたのかもしれませんし、引っ越しにより生活環境が変わったタイミングであったとのことですので、その変化に気持ちがついていかず、不安定になっていた時期だったのかもしれません。

相手を叩いてしまった際の対応として・・・
・本人の不安な思いを汲み、認め、落ち着いた後に相手の行動を説明していく。
・「見られている」と思い、不安な気持ちになった時の代替行動を示す（支援者に気持ちを教える　等）
・安心できる時間や楽しい時間を増やしていく。
・お友達とのやり取りがうまくいっている時をとらえ、その体験を根付かせるように働きかけていく。

CASE-12

イライラした時に行動が荒くなってしまうLくん

特別支援学校/高等部

基本情報と集められた情報

〇知的障がい
〇衝動性がある。
〇突然イライラするので予測が難しい。
・うまくいかないと、ぶつぶつ言いだす。
・突然カッとなったら、誰に対しても行動が荒くなる。
（ドアを強く閉める、暴言を吐く、他の子のお腹にグーパンチする　等）
・真顔で怒っている様子の時は、目がぐるぐると動いている。
・他児に比べて自分ができていない時や、やりたかったことができない時にカッとなることが多い。
・カッとなった時には、単語は出るが、しゃべりにくくなり、伝えるまでに時間がかかる。

支援者や家族が解決したいこと

イライラした時に、言葉で伝えられるようになってほしい。

提案された支援

・本人が自信をもって取り組めるような活動を工夫し提供する。
・活動を本人が選択できるように、事前にいくつか提示する。
・本人の言葉を代弁しながら、語彙を増やしていく。
・安心できる場面で話を聞き、本人への伝え方を工夫する。
・イライラした様子を事前の言動で早めに気づき、予防的な働きかけを行う。
・イライラを表現した後、早い段階で一緒に振り替える時間を取る。
・気持ちが落ち着いている時の関り方を工夫する。⇒ポジティブな気持ちを伝える。

ヒトコトコラム

感情を表現する手段を支援者と一緒に増やし、言いたい事を分かってもらった体験を積み重ねることで、言葉の力をつけ、成長に役立てていきましょう。

感情をコントロールするということは容易いことではなく、３～４歳くらいからその試みが始まり、20代前半までかけて育んでいく力になります。頭では理解はできていることも、感情が昂った際に行動を制御してコントロールできるようになるまでには長い時間を要するということになります。

特に、思春期から青年期にかけては、衝動性が高まる時期でもありますので、この時期のお子さんにとって感情をコントロールするということはより苦労を要するものです。多くの場合、感情が昂った際に色々なアプローチをしても中々お子さんも受け入れることが難しいことが多いので、まずは気持ちがおさまっていくことを主眼にしクールダウンを促していくことが良いでしょう。

他方、自分の中にある様々な感情に気づき、それを「怒っている」「嫌だ」など言葉でラベルをつけていくことにより、お子さんが様々な感情を認めていき、怒ったり暴れたりせずに気持ちを表現することを助けていきます。気持ちが落ち着いている時に、自分の気持ちをめぐって支援者とやりとりをしていくことは感情調整の力を育むことにつながっていくでしょう。

感情を表現する手段を増やしていくという意味で、言いたいことを相手に分かってもらった体験を積み重ねることや短いやり取りを繰り返しながら言いたいことを一緒にまとめていき、言葉の力をつけていくことは本人の成長に役立つと思われます。

おわりに

子どもは、大人との関わり・子ども同士との関わり・環境の織り成す世界の中で発達していきます。子どもの育ちに関わる大人には、子どもをみる力、育ちを想像する力、関わる力が必要です。1人の持つ専門性も大切ですが、子どもが育つ環境にいる大人が多様な視点で連携しながらその子の育ちに関わる事が必要なのではないかと思います。

そだちサポート勉強会が始まって3年が経つのだと思うと時間の早さに驚きます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴って多くの変化があり、実感のないままに時間がたったように感じることも多い中、この勉強会はオンラインの強みを生かして着実に広がりを見せ、実践を積み重ねてきました。自分が考えた事、発言した事、メンバーが考えて発信してくれた事やその時のメンバーの表情、それを通して自分が感じた事、それらはいずれも私たちの実体験です。この体験が、次に子どもに関わるエネルギーを満たし、支援の引き出しを増やすことにつながっているように思います。かくゆう私も、そだちサポート勉強会に参加すると、インシデント・プロセス法で広がる解決の糸口、参加者の皆さんの子どもへの想いにいつもたくさんのエネルギーをもらっています。

最後に、子どもの育ちのために、そこに関わる支援者のメンタルヘルスや支援の質の向上の為に「遠隔で繋がる」新たなシステムを構築し、丁寧な運営で皆をつなげてくださいました奄美地区障がい者等基幹相談支援センター「ぴあリンク奄美」大津センター長、福崎氏に心より感謝します。また、一緒に勉強会を続けて来た皆さんのおおらかさや明るさがこの会の繋がりの為にとても大切だったと思います。私たちも仲間に入れていただきありがとうございます。子どものこれからの為に一緒に学びを深めてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

2023年 9月1日

鹿児島大学 障害学生支援センター

特任助教 今村 智佳子

【共同編集 略歴】

髙橋 佳代
臨床心理士・公認心理士

【現職】

鹿児島大学大学院
臨床心理学研究科
准教授

【略歴】

2015年から鹿児島大学大学院臨床心理学研究科（専門職大学院）に着任（講師）。2017年 より現職。専門は臨床心理学。発達支援、育児支援、支援者支援に取り組む。

そだちサポートプロジェクトとして、地域の発達支援関係機関と共同で、地域の中での発達支援に取り組んでいる。
2019年度より、奄美地区障がい者等基幹相談支援センターと共同での取り組みを開始。

今村 智佳子
臨床心理士・公認心理士

【現職】

鹿児島大学
障害学生支援センター
特任助教

【略歴】

2014年から鹿児島大学障害学生支援センターに着任。現職。専門は臨床心理学。障害学生支援、発達支援、育児支援に取り組む。

そだちサポートプロジェクトとして、地域の発達支援関係機関と共同で、地域の中での発達支援に取り組んでいる。
2019年度より、奄美地区障がい者等基幹相談支援センターと共同での取り組みを開始。

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター（ぴあリンク奄美）

2013年4月開設。2018年４月より、現体制。
奄美大島内の５市町村より委託を受け、地域の障がいに関する相談をワンストップで受付け、対応を行っている。

奄美地区地域自立支援協議会の事務局も兼任しており、2019年度より、鹿児島大学心理系教員グループと共に、「そだちサポートプロジェクト」を立ち上げ、事務局として、地域の支援者に向けたオンラインの勉強会や研修会の企画・運営を行っている。

○事例について
※「インシデント・プロセス法」を用いた事例検討会は、実際に参加していただくことで、批判されない安心感や一問一答でのアセスメントのテンポ感、ひとつのケースについてすべての参加者が一緒に考えていくチーム感などをより感じることができます。

※「取組事例まとめ」は、あくまでも、「そだちサポート勉強会」第１期において、行われた事例検討の取り組みをまとめたものです。（より効果的な支援方法を提案しているものではございません）

※実際に参加された方たちは、以前の取り組みを振り返るツールとして、それ以外の方たちは、「いろんな視点や自分が行っている支援との同期や違いに気づく」「自分以外の人の考え方を知る」など、ヒントを得るためのツールとしてご活用ください。

参考資料

そだちサポート勉強会

第1期 実施状況まとめ

2020年度 ～ 2022年度

○実施状況 まとめ

○参加者アンケート 結果まとめ

【参加事業所及び関係機関】

シエル名瀬教室、にこぴあ、のぞみ園、はごろもの郷、ヒマワリクラブ、
ヒマワリ就学塾、　ここ園、愛かな、スターズ、聖隷かがやき、
ハートリハ龍郷、ほのぼの
大島特別支援学校、大島特別支援学校徳之島支援教室
鹿児島大学

【協力者】

住田 裕貴 氏（国分西小）

第1期　実施状況①

2020年度

開催日時	第1回：10月29日（木）19時～20時40分
参加事業所	17名（聖隷かがやき、ハートリハ龍郷、ここ園、のぞみ園、住田氏、事務局）
役割担当	事例提供：のぞみ園、司会：事務局

開催日時	第2回：11月26日（木）19時～20時
参加事業所	10名（聖隷かがやき、のぞみ園、ここ園、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	事例提供：のぞみ園、司会：事務局

開催日時	第3回：12月17日（木）19時～20時
参加事業所	10名（愛かな、聖隷かがやき、のぞみ園、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	事例提供：のぞみ園、司会：事務局

開催日時	第4回：2021年1月28日（木）19時～20時
参加事業所	14名（愛かな、聖隷かがやき、のぞみ園、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：のぞみ園、事例提供：聖隷かがやき、司会：事務局

開催日時	第5回：2021年3月11日（木）19時～20時
参加事業所	13名（聖隷かがやき、のぞみ園、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：聖隷かがやき、事例提供：のぞみ園、司会：事務局

第1期　実施状況②

2021年度

開催日時	第1回：5月21日（金）19時～20時
参加事業所	15名（聖隷かがやき、のぞみ園、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：のぞみ園、事例提供：聖隷かがやき、司会：事務局

開催日時	第2回：7月9日（金）19時～20時
参加事業所	16名（愛かな、聖隷かがやき、シエル、にこぴあ、のぞみ園、住田氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：聖隷かがやき、事例提供：愛かな、司会：事務局

開催日時	第3回：10月22日（金）19時～20時
参加事業所	27名（愛かな、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：愛かな、事例提供：聖隷かがやき、司会：のぞみ園

開催日時	第4回：11月19日（金）18時45分～20時
参加事業所	28名（愛かな、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、はごろもの郷、ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾、住田氏、高橋氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：聖隷かがやき、事例提供：ヒマワリクラブ、司会：事務局

開催日時	第5回：2022年1月21日（金）18時45分～20時
参加事業所	18名（愛かな、ここ園、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒワマリクラブ、住田氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：ヒマワリクラブ、事例提供：にこぴあ、司会：事務局

開催日時	第6回：2022年2月17日（金）18時45分～20時
参加事業所	22名（愛かな、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒワマリクラブ、住田氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：にこぴあ、事例提供：聖隷かがやき、司会：事務局

第1期　実施状況③

2022年度

開催日時	第1回：5月20日（金）18時45分～20時
参加事業所	24名（愛かな、聖隷かがやき、のぞみ園、ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾、大島養護、住田氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：聖隷かがやき、事例提供：ヒマワリ就学塾、司会：のぞみ園

開催日時	第2回：7月15日（金）18時45分～20時
参加事業所	21名（聖隷かがやき、スターズ、にこぴあ、のぞみ園、ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：ヒマワリ就学塾、事例提供：にこぴあ、司会：ヒマワリクラブ

開催日時	第3回：10月21日（金）18時45分～20時
参加事業所	37名（愛かな、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾、住田氏、林氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：にこぴあ、事例提供：のぞみ園、司会：愛かな

開催日時	第4回：11月18日（金）18時45分～20時
参加事業所	24名（愛かな、スターズ、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、住田氏、林氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：のぞみ園、事例提供：愛かな、司会：スターズ

開催日時	第5回：2023年1月20日（金）18時45分～20時
参加事業所	22名（愛かな、ここ園、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒワマリクラブ、大島養護、住田氏、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：愛かな、事例提供：スターズ、司会：聖隷かがやき

開催日時	第6回：2023年2月10日（金）18時45分～20時
参加事業所	35名（愛かな、聖隷かがやき、にこぴあ、のぞみ園、ヒワマリクラブ、ヒマワリ就学塾、ほのぼの、住田氏、大島養護、高橋氏、今村氏、事務局）
役割担当	前回事例報告：スターズ、事例提供：聖隷かがやき、司会：ヒマワリ就学塾

第1期 参加者アンケート

実施結果まとめ

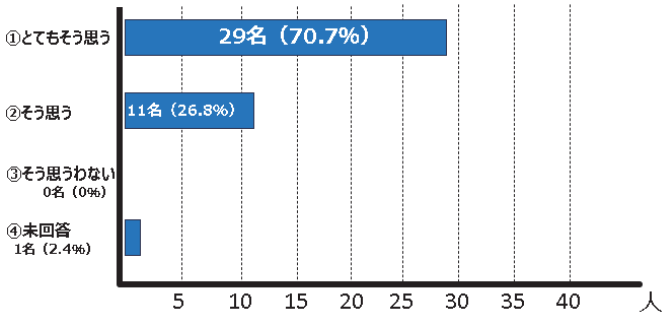
2020年度 ～ 2022年度

※そだちサポート勉強会の取り組みについて、2022年度末に、
参加事業所へ向けたアンケートを実施しました。

質問 1　**そだちサポート勉強会は、日々の業務に役に立つと思いますか？**

参加したほとんどの人が、「日常の業務に役に立つ」と感じた。

質問 1 に対し、41名から、回答が得られ、そのうち、29名（70.7%）が「とてもそう思う、11名（26.8%）が「そう思う」と回答し、未回答が1名あったが、「そう思わない」と回答した人はいなかった。



質問 2　**質問1の回答を選んだ理由を教えてください。**

「いろんな人の視点や考え」を共有することに、前向きなイメージを持つ人が多かった。

【学び/視点/気づきについて】

〇いろんな視点で、一人の子どもさんのことについて考えることで・・・
学びになる/視野が拡がった/自分では気づかない視点が持てた/自分だけでは、気づけない視点に気づくことができた

〇いろいろな事例をみんなで考えることで・・・
日々の支援を振り返る機会にもなった/自分に欠けているものに気づくことができた/すごく刺激になった/アセスメント力の向上にもつながると感じた/考え方を深める練習になった。

〇事業所スタッフの理解が深まり、子どもさんへの関りが変化したのを感じた。

〇他の事業所の支援に対する考え方も聞くことができて良かった。

〇先生方からのアドバイスもあり、日々の支援に役立つと感じた。

【インシデント・プロセス法について】

〇参加したことで、この手順で考えるようになった。

〇自分の意見だけでなく他の職員の意見も聞きながら、問題解決を図るようになった。

〇一問一答なので、質問も考えやすく答えも分かりやすかった。発言もしやすかった。

【その他】

〇オンラインの画面上に、記録を共有しているのがよかった。出された意見がリアルタイムでまとめられていくため、視覚的にも分かりやすかった。

編集後記

福祉の支援の現場では、人材育成を含め支援の質の向上が課題であり、取り巻く環境や支援者自身のメンタルヘルスは支援そのものに影響を及ぼします。人材の問題は何処の地域でも同様の傾向にあるのかもしれませんが、奄美地区という離島環境において人材不足や県本土での研修受講には大きなハードルがあり、当時名瀬小学校に勤務していた住田氏（現在、国分西小）と地域の人に呼びかけながら自分たちでできる研修を行っていました。

そのような中、2019年に奄美で開催された研修会での高橋氏との出会いからこの「そだちサポート勉強会」が生まれました。コロナ禍という今までに経験のしたことのない状況は人と人を遠ざけましたが、オンラインの標準化という距離を問題としない形は離島という環境には追い風となりました。

当初「事例検討会」という言葉に参加者も緊張している様子でしたが、「わからないと答えて良い」「自分が解決するとしたら」というルールがある「インシデント・プロセス法」を取り入れたことで、それぞれ経験の差があっても自身の考えを安心して発言できるようになりました。

回数を重ねるごとに、一問一答形式のアセスメント方法に慣れ、他の事業所の人たちと一緒に考える楽しさも共有できるようになり、今では、記録が追い付かないくらい早いテンポで行われ、多くの支援方法の提案がなされることに嬉しさを感じています。

今回、3年間みんなで取り組んだこの事例検討会を、報告書を兼ねた事例集として作成することになりました。「同じ状況にあっても、いろいろな視点や支援方法があるという事に気づくことができる」そんな事例集になったらという思いで作成しています。読まれた皆さんにとって日々の支援の一助になったら嬉しく思います。

最後に高橋、今村両氏をはじめ、この勉強会をはじめるきっかけを作り、今でも関わってくれている住田氏、この事例検討会に参加された、奄美大島の児童関係事業所の皆様や大島特別支援学校の先生方に心から感謝いたします。

2023年 9月1日

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター
（ぴあリンク奄美）
センター長
大津　敬
事務局担当
福﨑　伸悟

2023年 9月 1日　発行

Amami-Kagoshima

そだちサポートプロジェクト

HP ：https://sodasapo.jimdofree.com/

奄美地区地域自立支援協議会

HP：http://www.amami-jiritsu.org/

【お問合せ先】

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター

TEL:0997-69-4061　FAX：0997-69-4062

【付記】
このプロジェクトの一部は科研費20K02209の助成を受けて行われています。